

大学卒業2年目の風景

－女性の20代研究・その4－

工 藤 保 則

本論文は、「女性の20代研究」の一環として、工藤（2005, 2006, 2007）に続き、「地方出身で都市の大学に進学した女子大学生」だった3人へのインタビューをまとめたものである。インタビューでは主に、仕事（勉強）のこと、家族や恋人のこと、将来のことについて語ってもらった。

キーワード：仕事，ライフコース，都市と地方

1. はじめに

最近、20代について話題となるのは、その文化に関することよりも、フリーターやニート、あるいはワーキングプアの問題など、その仕事や働くことに関するもののほうが多い。本稿は20代の仕事に焦点を合わせたものであるが、フリーターやニートを対象とするのではなく、大学卒業後、正社員として就職して働いている女性を対象としている¹⁾。そしてさらにいえば、そもそもは地方出身者で都市の大学に進学した女性を対象としている。

そういう女性に対して、20代の10年間の継続的なインタビューから、ローカルトラックとジェンダートラックの交差するライフコースを動的に捉えたいと考え、筆者は4年前から調査を始めている²⁾。本稿は、その一環として行った大学卒業後2年たったときのインタビュー結果を示したものである。

2. 調査対象者の紹介

本研究におけるインタビューの対象者は、石川県小松市出身の広部理華、福井市出身の青木理恵、岐阜市出身の宮腰英理の3人である³⁾。彼女らは出身県は異なるが進学した大学・学部・専攻は同じである。筆者はこれまで、その3人に対して、21歳時である大学3年生が終わったとき、22歳時である大学卒業のとき、23歳時である大学卒業後1年がたったときにインタビューを行い、その結果を、工藤（2005）、工藤（2006）、工藤（2007）として発表してきた。ここで、その、工藤（2005）、工藤（2006）、工藤（2007）についての簡単な紹介を行っておく。

工藤（2005）では、10年間の予定で行うこの研究の問題設定、位置づけ、視点を示した。その上で、インフォーマントの紹介をかねた小中高時代のこと、3年生までの大学生活のこと、就職活動のこと、などについての3人へのインタビューの結果を示した。

工藤（2006）では、主に、実際の就職活動のことについてのインタビューを行った。インタビューの時期は卒業式後の春休みであったため、既にそれぞれの進路は決定していた。広部は製薬会社への就職が決まり（インタビュー時は赴任地は未定であった）、宮腰は名古屋市にある大

携帯電話会社への就職が決まっており、岐阜市の自宅から会社に通うことにしていた。青木は、福井市に帰って医療系の専門学校へ進学することが決まっていた。就職する2人は、希望した企業への就職であり、専門学校に進学する青木も含め、それぞれの話からは、高校までがんばって勉強をし、大学でも勉学・キャンパスライフともにがんばって充実させ、就職活動（進学）にもがんばって取り組んできたという、がんばることが得意な彼女たちの姿が見て取れた。

工藤（2007）では就職1年後（専門学校進学1年後）に行ったインタビュー結果を示した。大きなライフイベントである就職活動をおえ、「自分にあった仕事」「自分のやりたい仕事」と思えた職業につくことができた彼女らは（青木の場合は、それにむかうための進学）、その後、実際の職場（学校）ではどのように感じながら働いている（学んでいる）のだろうか。そのことを捉えようとしたインタビューからは、やりたい仕事についてだけではいわゆる自己実現には至っていない彼女らの姿を見ることができた。当然のことながら、職場において何をどうすれば自己実現につながるのかわからず、まずは目の前のことをこなしているといった状態であった。だが、そのときに「この先には何かあるのだろう」という気持ち、いわば「仕事の中の曖昧な希望」ともいうべき気持ちを持ちながら、目の前のことに取り組んでいる様子が捉えられた⁴⁾。

3. インタビュー調査から

本節で示すインタビューは、就職（専門学校進学）して2年が終わったときのものである。ここでは、主に、実際の仕事（勉強）のこと、家族や恋人のことなどについての話を聞いている。

1) 広部理華インタビュー（2007年4月28日インタビュー実施）

1年を振り返って

去年の夏くらいに新製品が出て、その関係でノルマをすごく言われるようになって、自分が何をやっているのかわからなかった時期がありました。

そういう時、お盆休みに入る前に、お母さんが交通事故を起こして加害者になってしまい、それが発端で実家にちよくちよく帰るようになりました。相手の方もなかなか治らなくて、ご高齢だったので結局お亡くなりになり、そういうこともあって、相手のご家族の感情も悪くなっていました。事故としてはいわゆる「もらい事故」だったんですが、家全体も暗くなって、事故処理も大変で、お母さんが仕事を辞めるかどうかという話にまでなってきて、私が実家に帰らなきゃというのもいっそう色濃くなってきました。

それが8月のお盆前だったので、所長に金沢に帰らせて欲しいことをお願いしたのですが、9月からの異動はもう決まってしまうって、さすがに変更はできないということでした。「次の半期を頑張ってくれたら、次回の異動ではこちらも考えるので」と所長もその上の支店長も言ってくれたんです。なので、その半期は和歌山最後の仕事のつもりで頑張ってた、2月に内示が出て、「金沢に帰れることになったから」と言われました。上の人が理解のある人だったので、こういう結果になったんですが、配属1年半でこんな異動は絶対ないそうです。私もダメなんかなと思っていたので、嬉しかったです。

お母さんは、結局、仕事を辞めました。刑事裁判になり、たとえ執行猶予付きでも刑がつくようなことになる、教員はみんな失職なんです。業務上過失致死で禁固1年に執行猶予3年だったので、自動的に失職です。県内で初めての事例だったみたいで、そういうことについての救

済措置が全くなってなくて、失業手当だけ200日分もらえて、退職金はもらえないんです。夏に事故が起きて、年度の途中だったので、そこで辞めたら生徒に迷惑がかかるというので1年勤めあげて、その間に執行猶予付きの判決が出てしまえば、自動的に失職ですからね。今は家でゆっくりしています。

この異動がかなわなかったら、私も会社を辞めないといけないかもしれないと思ったんですが、希望がかなったので、不満もあるけど会社を続けていこうと思えました。他の製薬会社のMRの人で仲良くしている人にも、「そういう希望を聞いてくれるところはめったにないから、いい会社だよ」と言われました。大手はやっぱりそういうところが冷たいみたいですね。そこが中堅の会社のいいところかもしれません。人生何が起こるかかわからないって、今回のことで本当にそう思いました。金沢に帰りたいという点では思っていた通りになったのに、その理由がだいぶ変わってしまったので、何があるかわかりませんよね。

MRの仕事については、去年の3月に薬価改正があって、どんどん薬価が下がっているんですね。でもその下がった分を加味せずに、目標設定はなされたりするので、本数はすごく増えていても目標に到達できなかったりするんです。昨年度の上半期は、価格の交渉とかは普段は関わっていないんですが、薬価が下がってきているのでどうしても値段交渉もせざるをえず、不当な欲求をする先生がいたりして、「医療品なのになんでこんな値引きをしないといけないんだ」という思いも出てきて、人間不信になったりもしながら働いていました。逆に、8月の頭に事故があって、仕事は仕事だというふうに切り替えられました。「希望をかなえてくれると言うし、これだけお給料をもらっているんだから頑張ろう」と、割り切れるようになりました。後期は人の汚いところを見てもそれはそういう人なんだと思って、いい先生もいるし、価格のことも悩まないうようにしようと心がけました。和歌山の生活自体も楽しくなっていましたし、基本的に人間関係にも恵まれていたので、最後の半期はいい時間を過ごせたと思います。金沢に帰るときには和歌山を離れるのがつらいくらいでした。

所長はあまり頼りにならない人だったんですが、ラッキーなことに和歌山営業所は関西支社内の営業所で営業成績がトップだったんですよ。だから、所長が頼りにならないことなんかも気にならなくなっていました。それと、社歴は1つ下で社会人としては1つ上の人が、後輩として中途入社で入ってきたんです。その人には相談がしやすく、30歳の若手の先輩と3人で、上司に不満を持ちつつも頑張っていたので、働きやすかったです。なので、大学卒業の2年間はそれなりに順調で充実していました。前任者が減らしていた営業先も全てとは言いませんが大部分を回復することができたし、上期に頑張ってベースを作った分、下期は順調に営業成績を伸ばすことができたと思います。

転勤するときになって、今まで苦手だと思っていた先生が惜しがってくれて、実はちゃんと認めてくれていたんだとわかって、感激しました。他のメーカーのMRの人に「あの先生は女性MRは相手にしたくないって思ってたようだけど、広部ちゃんだけは認めていたみたいだよ」と言われて、実際に先生からお餞別もらったり、送別会を開いてもらったりして、ただ単にお客さんとしての付き合いだけでなく人間関係ができていたんだなあと思いました。どこに行ってもそうだと思うのですが、自分の地元は石川県があるとしても、京都も和歌山も自分の中に残っていて、自分のふるさが増えるようで嬉しいです。

2年目は、今までは営業しているだけだったのが、研究会の話を取ってきたりするようになりました。薬剤師会とか医師会が定期的にやっている勉強会に関わるんですが、そのひとコマをも

らって、自分の会社の薬のお話をしたり、その話をしてもらえる先生を招聘したりしました。上司がしっかりしていなかったので、自分の裁量でやれるところがあって、良かったんでしょうね。そういうことも金沢でもできればいいなと思います。数字も大口を取ってきたということではなくて、小口が段々成長してきたという感じでした。

仕事のやりがい

仕事はやっぱり新規開拓ができると嬉しいです。大きいところを1つ取って、数字を伸ばすというのはラクなんですけど、小さいところをたくさん持って、その1つ1つが伸びていくというのも嬉しいんです。コツコツ頑張ってきた結果が見える気がします。派手な仕事をして、表彰されてハワイに行くというような人もいるんですけど、大きいところはまた取られてしまったら、終わり。小さいところを積み重ねていると、そこが1つだめになってもまた他のところを開拓していけますし、市場の安定性も良いような気がします。私は経費を月に1万円くらいしか使わない、お金を使わない営業をしています。

トータルでは失敗もあったり、怒られたりもしますけど、それもまあしょうがないのかなと思います。最初の頃に怒られるのと、慣れてきた頃に怒られるのは応え方が違いますよね。ガツーンときます。

25歳の私、30歳の私

25歳になってもこの仕事で働いていると思います。この人事を受けたことによって、会社に恩も感じていますし、「地元に戻したんだから辞めんなよ」オーラもすごいので、金沢で頑張っていたと思います。石の上にも3年で、少なくとも27歳くらいまでは今の会社で働いているんじゃないかな。27歳からはどうなっているのかな。実家に近い場所に帰ってきたら、女の人はずっとそこに配属になると聞いたことがあるんですが、今回は異例の人事なので、どうなるんでしょうかね。支店に移ったときのまわりの注目が全然違ったので、今後の動向が見守られていると思います。支店全体でも女性が2人しかいないんですよ。だから余計に注目を集めていると思います。せっかく異動させてもらったのにガッカリさせることがないようにしないと思いますね。ちょうど異動前に就活中の学生に話をするという機会があったんですが、ちょうど異動と重なったのでお断りしたんですよ。せっかく「事情もくんだ異動もさせてもらえていい会社ですよ」って言えたのに、残念でした。

30歳の自分は漠然としています。お母さんが失職してよくわかったんですが、仕事を続けられること自体がありがたいことだと思うので、30歳でも仕事はしたいです。でも今の会社で続けられるかはわかりません。転勤もあるし、結婚したら、そんな状況で仕事ができるかわからないし。私はいい条件を求めて企業を渡り歩くタイプではないので、転職で入ってくる人も出て行く人も多い業界なのに、私はたぶんこのままここで働いていると思います。内勤の仕事だと東京か大阪でしかなくて、金沢で内勤で働くというのは無理ですね。事務のお姉さんもいるんですが、正社員の方が辞めてしまうと、派遣を採用するみたいです。30歳よりもっと先はなかなか見えてこないです。親元が近いというのはいいんですが、地元にずっといたいというこだわりは実際はないです。おばあちゃんが生きているうち、母が元気になるまで、いれるまではいいなと思っていますが、ここに固執してここでしか働けないというのはないです。果たしてそれが年を取ってからそう思えるのかは謎ですが。

家族・彼氏のこと

おばあちゃんは元気なんですけど、運動しなさすぎて、足の筋肉が弱ってしまっていますね。足

が悪いということではないのに、とにかく動かないから歩けないんですよ。この前の選挙の時も、体育館の中を歩いているだけで、「足がしんどくなって歩けない」と言って、車椅子で帰ってきました。散歩とかりハビリになることとかしないといけいんですね。下の弟は予備校友達ができ、その子たちがやる気のある子みたいなので、のほほ一んとしたところがなくなって、キリッとしてきました。上の弟は今年の7月に教採を受けて、石川に帰ってくると思います。私も実家に帰らず、一人暮らしをすることにして良かったと思います。実家に大きい子どもがたくさんいるのはよくないですから。きっと来年からは下の弟が大学生になって、上の弟が帰ってくるんじゃないですかね。

去年の終わりくらいに北海道出身の彼氏とは別れてしまいました。こうやって帰ってきてしまうと石川の人と結婚したら、ずっと石川に住むことになるのかなと思いますが、今は何もない状態なので、気ままにやっています。転勤が決まる前に別れてしまっていたので、これもまた運命なのかなと思います。付き合っていたら、金沢に帰ってくるというのも違った意味合いになってきたでしょうし。

ここ数年は広部家の大きな変化の年だと思うので、それを見守って行きたいと思います。弟も出て行くだろうし、私もどうなるかわからないし、母も落ち着いたらきっと何か始めるといいますし。

2) 青木理恵インタビュー（2007年3月10日インタビュー実施）

1年を振り返って

7月くらいまでは、朝から夕方まで学校があって、座学と実技との組み合わせで、1年生のときとスケジュールはあまり変わりませんでした。7月、8月とテストが続き、また寝られない日々が続きました。去年も言ったかもしれないんですが、最初の3月4月から8月くらいまでの記憶は薄れていて、とにかく院内実習とこの間終わった実習の記憶があまりにも強烈なんです。実際の仕事に近づいてきているというのが自分でもわかっているんで、楽しいと言うか、充実しているなと感じています。

1回目の病院実習

10月から12月までは院内実習でした。専門学校の系列の病院へ4～5人のグループで行き、実際に患者さんを受け持ちました。そこで患者さんに対して関節の稼動域とか、筋力測定とか、さまざまな検査をし、評価した中からその原因を探って、目標や治療を考えていくというのを行いました。中枢、整形、小児、学校の課題の4パートに分かれていて、1パートを3週間ごとに変わっていきました。これが結構大変でしたね。朝練みたいに7時くらいに学校に行って、実際にやることを調べ、病院に行って患者さんを評価して、また学校に戻り、夜の9時ごろまでみんなで評価を元に分析するような生活でした。帰ってからも翌日のレポートを書かないといけなかったし、本当に忙しかったです。

患者さんと初めて接しておもしろく感じたのは、最初からどこが痛いということを伝えてくれる人というのはあまりいないんですよ。世間話をしてだんだんと親しくなっていく中で、心を開いて、どういうところが痛いとかつらいとか言ってくれるようになります。実際の評価は、まだ学生なので未熟なんですけど、そういう過程を学ぶことは貴重でした。学生同士で患者役をやり合っていたときは、お互いに勉強している下地があるので、簡単に説明すればわかってもらえるのですが、実際の患者さんには、よく説明したつもりでもわかってもらえていないこともあり

ました。口で説明するだけではなく、実際にやってみて説明するのですが、やってみるのも難しい動きなので工夫が必要だったりします。その疾患によって脱臼しやすいとか、手術したときに皮膚を切開した位置とかを、リスク管理として考えたり、気をつけたりしないといけません。そういう要素が加わってくることが、実際にやってみるとなると難しかったです。

メインは1つの疾患がなんですが、その他の合併症もいろいろあるので、それをチェックしていったり、実習で体験してみると、勉強していたときよりも、気をつけないといけないことがどんどん出てくるんですね。最初におおまかな情報をカルテからピックアップして行って、合併症、既往歴、服用薬を見て、さらにその副作用を調べて、学校に戻ってそれを検証して、という、その作業が大事だということを痛感しました。なので、実習を終えて、カルテの見方が細くなりました。X線をトレーシングペーパーで写し取って、学校に戻ってから調べなおしたりもしました。大変だったけど、知識はものすごく増えた3ヶ月間でした。グループでやっているのでも、同じ現象を見ているのに、人によって見方が違って、お互いにそれを話し合うのもおもしろかったです。グループに1人先生がつくので、先生には見守ってもらって、変なことになると軌道修正されます。年明けからはまたテストでした。2月初めまでずっとあって、これもかなりハードでしたね。みんなで勉強してどうにか乗り切りました。

評価実習

そして、2月13日から3月10日まで、また病院へ本当の評価実習に行きました。秋のやつは1時間とか時間が決められていて、その中で評価をこなして学校に帰るという感じだったんですが、この2月からのひと月は、朝8時くらいから夜の7時、8時くらいまで、毎日病院に通う生活でした。最初は、病院も迷路みたいで、わかりづらくて大変でした。PTも30人くらいいて、その人達とも慣れないので緊張したりして、疲れました。OTも17~18人いて、リハビリスタッフが充実した病院なんです。

午前中はリハビリ見学でPTの先生について、病室をまわって治療見学をしました。それで自分担当の患者さん2人にいろんな評価をして、問題点を探っていくという実習でした。私が受け持ったのは、70代後半の女性と、60代の男性です。1人は大腿骨の骨折で急性期でした。この方はいろんな合併症があったんですが、入院前は畑仕事とか色々やっていたので明るい人柄でした。なので、関係も作りやすくて、こちらも病室に行くのが楽しみでした。2人担当を持ちつつ、1人をメインの患者さんとしてレポートを書くことになっていたんですが、私は70代後半の女性の方がメインの患者さんだったので、評価自体も順調で、レポートも早めに仕上げることができました。それで、実際に治療もさせてもらうことになりました。術後3週間は足裏を地面につけないようにしていたので、筋肉が衰えていました。寝転んでもらって足首や股関節に抵抗をかけて、いろいろ動かしてもらって運動や、足裏や足指の感覚が衰えてくるのでレンジつまみをしたり、タオルを引き寄せていく練習などをやらせてもらいました。患者さんは「リハビリも楽しみ」って言うてくれて、自分のおばあちゃんみたいな感じで、世間話や人生経験を聞かせてくれたりしました。お互いの人間関係がうまくいかないと評価も協力的になってももらえないし、治療も順調に進まないというのがあると思います。「このPTの先生が言うのなら、もうちょっとがんばろう」と思ったりするのもあるみたいです。担当の患者さんはひざが90度くらいにしか曲がらなくて、そのままほっておくと本当に曲がらなきゃならなくなってしまうので、すごく痛がるんですが、無理やりにでも動かさないといけないんです。それも嫌なことだと思うのですが、我慢してやってくれました。

60代後半の男性は中枢の方で、脳梗塞でした。麻痺が残っていて、症状は回復してきて、実習後半には外泊も許可されているような方でした。明るくて協力的な方だったので、すごくいい関係が作れました。評価自体は大変だったんですが、嫌がらずに協力してもらえたので助かりました。患者さんに恵まれていましたね。夕方の6時くらいに評価が終わって、その後PTの先生とのフィードバックがあるんですね。長いときには2時間くらい、早く終わって1時間くらいでした。家に帰ってごはんを食べて、また調べたりまとめたりして、睡眠時間が2～3時間しかないのが辛かったです。私の行ったところは熱心な先生ばかりだったので、余計そうだったみたいで、他の病院に行った子はそうでもない子もいました。アドバイザーの先生と学生の関係というのは怒られることもあるし、説教されることもあるし、厳しいのですが、終わった後はごはんを誘ってもらって、いろんな話を聞かせてもらいました。その先生は28歳の女性だったんですが、「患者さんの経過とかも気になるだろうから、また病院においで」と言ってくれて、本当にいい経験になりました。

来年の学校生活

来年は6月から1ヶ月半、治療実習に行って、8月後半からまた1ヶ月半、11月から1ヶ月半、治療実習があるので、それだけで5ヶ月たってしまいます。その隙間に卒論をやって、3月には国試があるので、今年以上に忙しくて記憶がなくなるんじゃないかと思います。一応、どこに実習に行くか希望を聞いてもらえるので、京都に希望を出そうかと思っているんですが、それが実際にかなかどうかはわかりません。国試は内科学とか基礎知識と、実際の解剖とか、評価するようなものもあります。この3年間勉強したことを全て網羅することになるんだと思いますね。でも、国試よりも実習のほうが大変やろうと思います。期間も今年の2倍になりますし、求められるレベルも評価実習と治療実習とは全く違うものみたいです。実際に治療をして、その評価が正しいか、それによって患者さんがどの程度回復したか、ということまで求められるんですよ。

家族・彼氏のこと

最近の出来事としては、小松にいる兄が結婚するらしく、彼女が福井で中学校の先生をやっていて、高校のときの同級生なので、兄の近くで新居を構えるみたいです。弟は進級して、勉強は忙しそうですね。お父さんには、1月、2月にいきなり「京都に就職するならまだいいけど、山口には行かせられん」と言われました。でも、4～5日前に就職の話をしたときは「彼氏が就職もしていないのなら、結婚せずに京都に行くのは良くない」と言われました。

彼氏は10月にアメリカ留学から帰ってきて、その後の3ヶ月間は東京の青山にある国連関係の施設でインターシップをやっていて、それも終わって関西に帰ってきました。6月に京都か大阪で教員採用試験を受けるみたいです。京都の中学や高校は社会の先生を募集してなくて、京都で先生になるのは難しいのかなと思います。本人は社会が希望ですが、1年目はとりあえずお金を貯めるために、英語の教師の枠でも応募しているみたいです。この前、大阪の北千里にある帰国子女が生徒の半分を占めている学校の面接を受けて、月曜日にその結果が出るようです。そこは非常勤での採用なんですが、お給料も悪くないので、受ければいいなと思っているようです。親は「どうなった」と聞いてくるので、心配しているんでしょうね。私が卒業後、福井の病院に勤めてしまうと3年くらいは辞められないので、できれば1年目から京都か大阪の病院で就職したほうがいいなと思っているんです。

彼氏が日本に帰ってきたとき4～5泊福井に来たんですね。その時、彼氏がお父さんの話をよ

く聞いてくれるので、すごく気に入って、3月くらいにも「福井に遊びにこんのか」と言っていました。だから、後はタイミングとか彼氏の就職とか、そういうことだけです。母は「福井で3年くらい働いてお金を貯めたほうがいいんじゃない」って言うんですけどね。とりあえず、来年は「大阪か京都で一緒に住みたいんだったら、頑張って採用試験に受かって」ってハッパかけようと思っています。でも、今の私の最大の関心事は、次の実習に向けて勉強しないといけないなということです。

25歳の私、30歳の私

25歳の自分はもしかしたら結婚している可能性もあると思います。就職は絶対にしていると思うので、就職と結婚という大きな転機の年になるかもしれません。10月くらいに就職を決めなければならないので、その後いろいろな変動があると困ると思いますが、30歳はできれば同じところで勤めて、若い人を指導できるくらいの中堅の立場になりたいですね。まだはっきり整形か中枢か決めていないんですが、どちらの専門になっているか決めていて、専門的な仕事に進んで行きたいですね。家庭生活では1人目くらいは産んでいたい。あまり先のことは考えていないんですが、関西に住んで、40、50って年を重ねていくのかなと予想しています。福井にずっと住むのも悪くないと思うのですが、彼氏の希望もあるので、それはしないような気がします。大学卒業してから、それなりに想像通りにやってこれているので、これからもそれなりにやっていけるのではないかなと思っていますが、どうなるんでしょうかね。彼氏がどうしたいかを頻繁に確認して、こちらの希望も伝えてあるので、それでうまくいっているのかもしれませんが。彼氏が東京で3ヵ月インターシップをやるって言い出したときも「東京に住みたいと言われたらどうしよう」と思ったんですが、終わったとき「やっぱり関西が落ち着く」と言ったので一安心でした。

ハタチからを振り返って

ハタチからの5年間を振り返って、私は大学を出てから専門学校に入ったわけですが、もし高校卒業したてに専門学校に進学していたらどうだっただろう、そのほうが良かったのかなと思うときも、たまにあります。みんなを見てみると、20歳くらいから働いて、実習に行ったときに同じ年代の24歳のPTが結構いて、その人たちはプロフェッショナルで、「私もこんなふうになれていたのかな」と思ったりしました。でも、大学時代はいろんな経験もできたし、私にとって必要だったと思うので、大学に行って良かったんだろうなと思います。医療系の知識はみんなと同じくらいなんですが、大学で学んだ知識なんかは他の人よりはあって、その分、深い話ができたりして、大学で学んだことも大事だったと思います。

3) 宮腰英理インタビュー (2007年5月26日インタビュー実施)

1年を振り返って

2年目も最初のほうは昨年に引き続いて同じ現場で働いていて、モヤモヤしていました。すごい人数をまかせられているし、責任は重かったんですが、「こんなんでいいのか、こんな仕事のやり方でいいのか」という気持ちが常にありました。それで、自分は間違っていると思っていることをやりながら黙ってられるタイプではない、ということが分かり始めたんですね。

6月くらいに後輩が入ってきて、8月くらいに先輩が抜けてしまい、上司を除いて社員の中では自分が1番上になったんです。先輩が抜けたことに対しては「自分がやっていけないといけないんだ」ということを強く感じたし、後輩に対しては私が割と早い段階で社員の仕事をやってい

ったことはよくもあったけど、1オペレータとしての経験が少なかったために、派遣さんの指導をする面では苦労したので、研修の期間を長くしてあげようと考えました。後輩にはマクロ的な目で組織の問題点を見る目は持っていて欲しいけど、まずはオペレータとしての仕事をやってもらおうと思って動き始めました。このことは上司にも後輩にも言いました。

そのことも含め、派遣さんの指導に関しておかしいところを改善していこうと思いました。やっぱり上司は最初、「まあまあいいじゃないか、変えなくても」という姿勢でした。あくまでも「働いている派遣の子の意見を尊重しよう、そんなに厳しくしなくてもいいじゃないか」と言うわけですよ。当然、私はカチンとくるんですが、そのうち思ったのは、そういう上司たちの言いたいことも半分わかるなど。働いている人たちに辞められても困るし、その人たちのESが高まらないと職場としても良くなならないし、お客様に対してのCSも良くなならないということもわかったんですよ。ただESの向上は自由にさせるのではなく、仕事に対してのおもしろみとか、やったなとか、人の助けになったと思うようなところで感じて欲しいと思ったんです。それで、いろんな方面からアプローチしていきました。そうすると段々「もう好きなようにしてくれ」という雰囲気になってきたんです。

もう1つ心がけていたことがあります。私はどの上司も嫌いだったんですが、その人たちのことを敵視しても自分にメリットはないと考えて、フランクな会話も積極的にするようにしたんですよ。それでも「この上司はこんな話しかしないのか」という気持ちもあったんですが、ちょっとでもお互いが楽しくいられるようにしようと思いました。

そんなときに1番トップ、所長という立場で40代のやり手の人がきたんです。その人が来れたのが6月でした。私はそれまでも人事の人と飲んだりして、現場での私たちの働き方はおかしいと再三訴えてきていたんですね。「現場での駒として働けというのが会社の考え方なのか、それはおかしいのではないか」ということを訴えられるような、いい会社なんですよ、うちは。「これから仕事をやっていく上で、モデルとなるような人が欲しい」ということも訴えました。現場の駒的にやっていると確かに仕事の内容は身につくんですけど、そんな我慢仕事ばかりじゃ、みんな辞めて行っちゃうんですよ。

そんなこともあってか、本当は現場に3年いないといけなかったのが、2年に短縮されたんです。オペレータをまとめる役職にスーパーバイザーというものがあるんですが、私のいる代理店支援事業部にもスーパーバイザーという役職を設けようということになりました。そこで所長に私と同期の男の子が呼ばれ、「スーパーバイザー、SVになってくれ」と言われました。でも、私はお断りをしました。そして、「SVという仕事はどういう仕事かも役割付けされていないのに、名前だけいただいても組織は何も変わらないと思う」と言いました。自分として納得のいかないことを色々と話して、所長はどうお考えなのかということを知りました。所長は、今では、その当時のことを「なんて生意気な奴だと思ったけど、一方でなかなかおもしろい奴だった」と言っています。生意気は承知でした。でも、わかってくれると思ったから言いました。でないと怖くて言えませんから。同期の男の子はいい子なので、私がそういうと「あ、僕もです」と言ってくれました。後から聞くと所長は「宮腰を落とせば、同期の男も落ちる」と思ったみたいです。

それから2週間くらいどういうふうにするのかという事業計画案を考えてもらって、また同じ部屋に呼ばれ、改善点などを示してもらったので、「それならお受けします」と言いました。ここまで一社員のためにやってくれるんだと感激しました。「いいセンターを作っていくために私も全力を尽くしていきたい。今まで何度言っても変わっていかなかったし、前の所長に直談判し

て、それでもわかってもらえず何度も涙したけれども、今回は頑張れると思う」という話をしたら、所長も同じ気持ちだと言ってくれ、「みんなで頑張ろう」ということになりました。

そういうことがあって、それまでより少し冷静な目で、現場のことを見られるようになりました。6月のことです。先輩もひどい派遣さんがいることとか人事に訴えていたんですが、私は派遣さん個人のことを批判するよりも、組織としてそういう人に対する評価や受け入れ方などを考える必要があると思っていましたから。

後半くらいになってくると私に異動話も出てきて、同期も2年から2年半で出るかもしれないと言われていたので、どうということやりたいか明確化して考えろよと言われました。

その頃から積極的に東京での研修を受けるように申し込みました。新しい事業計画を立ち上げる研修だったり、マーケティングの研修だったり、広告の研修だったり、会社がお金を出してくれて外部の会社に委託してやる研修でした。コンサルティング会社の人に来てくれて色々教えてくれます。1週間くらいの研修で、15万円くらいかかるんですが、費用は会社が出してくれる。それがやっぱりうちの会社のいいところなんですよ。

私はもともとこの会社にずっといる気はなく、自分のスキルを高めていくためにこの会社にいると思っていたので、そんな研修を受けていると独立もいいかなと思ったりするんですよ。でも会社作るのって、人脈とか資本金とか必要じゃないですか。自分が法務も経理も営業もやるのかということそういうものではない。私は自分がそこまで能力があると思っていないし、やりたいことも明確化していないので、そういう研修を受けて自分を刺激して、高めていこうと。

私は基本的に勉強好きなので、研修内容を応用して仕事ができるようになるのもうれしかったです。前にも増して自分なりの色を出せるようになったのも、良かったんだと思います。上司から見ても中堅の存在から見ても、ハッキリ物を言うし、私はたぶん怖い存在だったと思います。私はそう思われてもいいと思っていて、意見を言わざるを得ないのが私の性格だし、言い方ややり方はともあれ、それを出せるようになってきたのが良かったですね。

2年目の新たなモヤモヤ

うちの会社がいま他社さんに追われているのは、会社全体に、絶対にここで踏ん張って利益を上げてやるという覚悟がないからだと思うんです。どこの会社でもそうだと思うんですが、うちの会社も上の顔色を見て働いているところがある。それで、上の人が「このやり方で利益があがるだろうから、頑張ろう」という方針を打ち出したときに、それが段々下に下りていくにしたがって、目的がすっぽり抜け落ちて、とにかく上の人がこうやれって言っているからという、そこばかりが強調されて、違う方向にいつてしまう。やり方ではなくて、利益を上げていくという目標が大事なんだということを忘れてはいけない。そういうモヤモヤがいまはあります。2年目のモヤモヤですよ。

社内の付き合いとか社内営業とかもあるんです。私はそういうの全くくだらないと思います。その人がいかに仕事ができるかで評価するべきだと思う。私はそういう体制とどこで妥協点を見つけていくのか、それともやりたいことが明確になって外に向かっていくのか、これは来年からが楽しみだなと思っています。

働くということ

働くってことは私にとって必要なものですね。なくてはならないもの。本当はこんなんでもいいのかなとか、仕事を辞めたいとか、転職したいと思うことは多々あるんですよ。でも、実際に家にずっといてボーッと過ごせるのかなと考えたら、それはできない。私には働く場所がある

から毎日が充実しているんだと思う。

でもまだ東京に行きたい気持ちもあります。欲張りなんですよ。結婚もしたい、子どもも欲しい、仕事も続けたい。そうになったら何かを我慢しなきゃならないこともあるわけじゃないですか。仕事は必要なものですが、それがプライオリティの1位なんだとしたら、迷いなく東京行きを考えるけど、そうでないのなら、今みたいな名古屋圏のほうがいいんですよ。東京に行って仕事をして、相手を見つけて、子どもを産んだときに、子どもを育てる環境として東京はアリなのかと思います。すごく保守的な考えなんです。名古屋にいれば、みんなが私立お受験なんてことはありえないし、親もいるので助けてもらえるかもしれないし。

25歳の私、30歳の私

働き出して2年目の私は、なんとなくこんなことをしたいなというのが見えてきたという感じです。希望とか願望だけではなくて、現実と寄り添った形で。それでも私は何かがやれるし、何かをやりたいという秘めたものもあるんですが、25歳の私は来年ですが、より自分の目標を明確にしていきたいというのがありますね。来年はまだそのままかもしれないけれど、偉い人とも会うことが多くて、会社のことがよりわかるようになっていっていると思う。それで、これは違うと思ったら別の会社に行く準備をするかもしれないし、今付き合っている彼とも結婚しようとしているかもしれない。それが25歳以降の自分ですかね。

30歳の私。いつもこれを考えると悩むんですが、理想としては結婚して子どもを産んで、仕事も続けている。今の会社であればそうなっていると思います。もし、今の会社を辞めていけばパートナーと東京に行って仕事をしているかもしれません。でも、そんな強さはないから、結婚して子どもを産んで、今の会社の福利厚生にしがみつikitつ、私の人生これでいいのかなってモヤモヤしているかもしれませんね。大学院への進学は私の根底にあるものなんですよ。大学院には年齢制限はないと思う。今は何がやりたいか模索している段階なので、私が楽しいなと満たされることをやっていたいと思います。最近、年齢ってこうやって重ねていくものなのかなと思うんです。ハタチくらいの頃は30代なんておばさんだと思っていましたが、それは違うんですよ。きっとどの年代になっても、常に新しいことはあるんだと思います。

ハタチからを振り返って

大学時代は今の自分のベースとなった大事な時期でした。私はきつい人間でハキハキ物を言うし、なんでも頑張っちゃう。これは大学時代に培われたものです。高い目標が自分をやる気にさせるというのは、大学時代に気づいたことで、それに実績がついてきていた時間でした。努力は人を裏切らないとよく言いますが、それを体得できた4年間でした。それは会社に入ってから変わっていません。

だから、会社で社会人1年目の子たちに話をしてくれと言われたとき、私は「とにかく必死になって欲しい。全力でやって欲しい」という話をしました。あまりにも仕事をしすぎたときに、血尿が出て、病院に行ったら、ストレスと過労で膀胱炎になってたんですね。そういうこともある。でも、まあ頑張ってやっていかないとはいけませんから。これまでもそうしてきましたから。

4. おわりに

前節で示したインタビューからは、インタビューにこたえてくれている3人が就職（専門学校進学）2年目となり、新しい環境にも慣れてきたことが分かる。仕事（勉強）のペースもつかみ、

それぞれのやり方が身についてきたことも読み取れる。また、会社のことを考えるようになってきたこと、少しずつではあるがこれから先のことを考えるようになってきたことも伝わってくる。そのこととも関連するが、新しく属した社会の規範を理解し、それになじむ、あるいは反発する、ということが行われていることから、2年目になって、職業的な社会化が実質的に始まってきているようにも思われる。

職業的な社会化が始まるには、その土台となる規範の取り込みが必要である。そのことから考えると、1年目はその取り込みの時間であり、当然のことであるが、職場（学校）においてはまずは受身的なことがほとんどであり、仕事（勉強）への積極的・主体的なかわりはほとんどない。ある意味で、人の誕生における「1ヵ年の早産」みたいなものだったかもしれない。

その1年目については、工藤（2006）では、（仕事とライフコース展望を重ね合わせて、その展望を）「確定とする前の待機状態といった段階」のようだとした。そのことを踏まえると、本稿で示した2年目の様子は、まだ、何らかの確定や決定を行うまではいかになくとも、自分自身のライフコース展望と「仕事の中の曖昧な希望」とのすりあわせを行っている、といった段階なのかもしれない。

次のインタビューは、就職（進学）して3年目が終わったときのものになる。そこでは、新卒採用の三分の一が3年以内にやめるといわれる昨今、それとくらべてどうなっているのか、自身のライフコースにおける何らかの確定・決定を行っているのか、などについて考えることになるだろう。また、それともかかわってくるが、これまではインタビューの結果を示すことを中心に行ってきたが、次は就職後（進学後）3年目になるということもあり、対象者も25歳になるということもあり、働くということについての理論的な検討や女性20代についてのライフコース論的な考察も行うつもりである。

注

- 1) 後で説明しているが、調査対象者のうちの1人は、大学卒業後に専門学校へ進学している。
- 2) ローカル・トラックとは「それぞれの地方出身者が、アカデミックな進路形成とは別次元ものとして、自らの地域移動について選択していく進路の流れ」のことをいい、「大都会には大都会のローカル・トラックがあり、地方にはそれぞれ固有のローカル・トラックがある」としている（吉川2001:223）。
ジェンダー・トラックとは、そもそもは「学校組織を構成する女子教育観や生徒・学生の内面化する性役割観に基づいて、学校間で形成されている『層』構造のことを意味するものであり、学力水準に基づくトラックと同様、それに基づいて生徒・学生の進路を分化させる構造」（中西1998:12）を指して中西祐子が用いた概念である。またそれに対しては尾嶋・近藤（2000）では「中西（1998）は学力水準とは独立して性役割観に沿う形で分化する女子の進路分化を『ジェンダー・トラック』と名づけたが、ここでは天野（1986:69-70）のいう『女性専用軌道』（female track）や木村（1999:37-38）のいう『ステレオ対応型の専攻』と同じ意味で、その進路や専攻に性による偏りがみられるものを『ジェンダー・トラック』と呼んでいる」（尾嶋・近藤2000:45）という別定義がされてもいるが、本稿では、後者の意味によって用いている。
- 3) インフォーマントの氏名や他の固有名詞については、一部変更している。
- 4) もちろんこれは、玄田（2001）や玄田編（2006）の言葉を借りた表現である。

参考文献

- 天野正子編、1986、『女子高等教育の座票』垣内出版
 玄田有史、2001、『仕事の中の曖昧な不安』中央公論新社
 ———編著、2006、『希望学』中央公論新社（中公新書ラクレ）

- 吉川徹, 2001, 『学歴社会のローカルトラック』世界思想社
- 工藤保則, 2005, 「『女性の20代』研究序説」『仁愛大学研究紀要』(3)
- , 2006, 「大学4年生の風景」『仁愛大学研究紀要』(4)
- , 2007, 「大学卒業1年目の風景」『仁愛大学研究紀要』(5)
- 中西祐子, 1998, 『ジェンダートラック』東洋館出版社
- 尾嶋史章・近藤博之, 2000, 「教育達成のジェンダー構造」『日本の階層システム 4 ジェンダー・市場・家族』(盛山和夫編) 東京大学出版会